

2. 7世紀のたたら跡 御陵大岩町遺跡



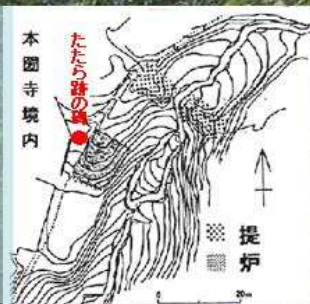
2. 御陵大岩町遺跡 (7世紀のたたら跡)

『日本書紀』巻27、天智天皇9年(670年)

「是歳、水碓を造りて冶鉄す」

この記事から、堤を築いて、ダムを作って水車を動かし、この水碓(みずうす)によって鉄鉱石を粉砕して 鉄製錬を行ったとの説がある。

大陸・朝鮮半島の先端技術導入を進めた天智天皇陵に隣接する山科のこの地で 7世紀後半の堤・炉があるたたら跡が出土し、この遺跡が符合するとの考えもある。



御陵大岩町遺跡 (たたら) 跡

北海道大学博物館 天野哲也ほか「コラム-御陵大岩町遺跡の水碓-」より転記)

www.city.kyoto.jp/bunshi/maibun/tizudaityou/yamasinaku.html

御陵大岩町遺跡(大岩たたら跡)は、天智天皇陵が隣にあることや、『日本書紀』天智九年中の「水碓」についての記述がこの遺跡と関連があると考えられることにより、以前から注目されています。

長さ 20 メートル、高さ 2 メートル、幅3メートルほどの堤状遺構と、幅 25 メートル、10 メートル四方のなだらかなテラス状の部分からなり、テラス部分の表面に散乱した鉄滓は二次堆積であることが分かっています。

遺跡の成立年代について詳しいことは明らかではありませんが、天智天皇陵の領域内にあたることから、操業時期は 699 年以前の 7 世紀後半と考えられています。また、採集した鉄滓は調査結果から、流動性のよい製錬滓で、磁鉄鉱が原料鉱石であったことが明らかになっています。

中大兄皇子(天智天皇)が作ったとされるこの「水碓」についての『日本書紀』の記述を冶金学的見地から考察すると、鉱石をくだいて砂鉄と同様の粉状にするためのもの

と解釈でき、水碓は鉱石をくだくための装置であるといった理解が専門家の間で進みました。



石柱が立つ場所は南北に続く小さな尾根筋でこの尾根の東側斜面下には小さな谷川がこの尾根に沿って流れている。

石柱の南側の尾根筋は雑木が生い茂っているが、平坦面があり、その下は谷まで境内の一部に平たく削られている。

また、石柱のところからは尾根の東斜面に沿って奥へ雑木林の中を奥へ山道が付いている。

資料に見られる製鉄炉があつたとみられ、鉄滓が散在していたテラスはどうも石柱が立つ場所より南側の平坦面　そして堤は道に沿って登ったあたりと推察されるのですが、山道を登って行くと、いくつか起伏がり、また　斜面を谷川まで降りたのですが、堤の位置は分からず、また、鉄滓が散在すると記録されているのですが、よう見つけませんでした。



古代のたたら跡御陵大岩町遺跡 南側からの全景 2013.8.26.

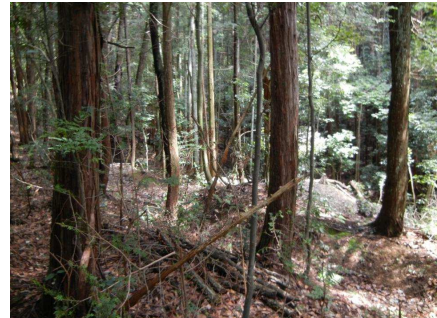


この尾根筋の上から、石柱を眺める 2013.8.26.

が堤のあった場所と見られるのですが、よくわからずでした



製鉄炉があったテラス状の場所と推察される石柱横の平坦地



堤があったという尾根の東斜面奥への道周辺の雑木林の中 2013. 8. 26.



東斜面の下を流れる谷川にも下りてみましたが、堤の痕跡はよく分らず 2013.8.26.



たたら跡の尾根の奥から本園寺境内を眺める 2013.8.26.

